

あとがき

1974年、風光明媚な関門海峡を臨む北九州市門司に生まれた私は、戸ノ上山の豊かな自然に囲まれ、毎日泥だらけになって遊ぶような幼少期を過ごしました。小学生ではサッカー、中学ではバレー、高校では空手、大学ではラグビーと、常に身体を鍛え、スポーツから「まず健康であること」、「怪我をしないこと」、「努力とチームワークの大切さ」を学びました。

医師を志したきっかけは、中学生の時に祖父がガンの痛みに苦しみながら亡くなったこと、そして高校生の時に母もガンを患った経験です。「痛みに苦しむ人を助けたい」という思いを胸に、小倉高等学校を卒業後、長崎大学医学部へ進学しました。

1999年に長崎大学病院麻酔科に入局してからは、手術やガンの「痛み」をいかに和らげるかを第一に考えて診療に携わってきました。2003年には大学院に進み、「薬理学」「ペインクリニック」「緩和医療」を学びながら、重度痙攣治療（バクロフェン髓注療法）や難治性疼痛の新しい鎮痛法の研究に取り組みました。

大学院時代にご縁のあった菅整形外科病院では、整形外科診療に強く惹かれました。澄川耕二麻酔科教授、菅尚義理事長のご厚意により、大学院修了後の3年間、整形外科診療を学ばせていただきました。その後長崎医療センター麻酔科に着任し、当時はまだ普及していなかった「超音波ガイド下末梢神経ブロック」に積極的に取り組みました。

2011年に再び菅整形外科病院へ迎えていただき、当初は整形外科手術の麻酔とペインクリニックを並行して行っていましたが、徐々にペインクリニックの患者さんが増え、2021年には「ペインクリニック・整形外科」を標榜することになりました。

現在は超音波、透視、MRI、CT、手術室などの充実した環境のもと、ブロック治療、ハイドロリリース注射、高周波熱凝固療法、パルス高周波法、凍結肩の非観血的関節授動術、ボツリヌス療法、バクロフェン髓注療法、硬膜外腔癒着剥離術、脊髄刺激療法、椎間板内酵素注入療法、PFC-FD療法、2mm切開ばね指手術、もやもや血管の動注治療など、多くの新しい治療法を積極的に導入しています。

少しでも痛みをやわらげ、患者さんが元気と笑顔を取り戻せるよう、これからも真摯に診療に取り組んでまいります。

長崎くんちと私・・・

私生活では、平成 24 年から毎年「長崎くんち」に紋付袴で参加しています。多くの方々との交流を通じ、長崎の文化や歴史を身近に感じる、私にとって大切な時間です。

今年は、昨年の万才町に続き、諏訪町の皆さんにお世話になりました。長男が龍方（じやかた）として出演したこともあり、稽古から庭見世、本番まで、温かいご支援とご声援をいただき、心より感謝申し上げます。

小屋入りの頃は少し頼りなかった息子も、稽古を重ねるうちにたくましく成長し、龍の感情を表現する龍尾（じゃび）を任せられました。「優雅で勇壮に美しい」龍踊を目指す山下総監督のもとで、本番では見事にその姿を披露してくれました。

私自身も、副帳面という大切な役を仰せつかり、庭先回りではインカムで正帳面や龍監督と連携しながら、白龍を約 1,400 軒の皇上先へ確実に案内する役目を務めました。「うちの店も皇上して!」、「私の家もお願いします!」といった新規皇上の依頼も次々に寄せられ、体力的に大変な場面もありましたが、全てが無事に終わった後、息子と家で交わしたビールでの乾杯は何よりも嬉しい瞬間でした。

神恩感謝、神人和楽——今年も長崎くんちは大いに盛り上がり、諏訪町の皆さんと素晴らしい時間を共有できました。心から感謝申し上げます。

令和 7 年 12 月

